

VI) 情報の提供、諸報告に関する事項

1. 情報の提供方法及び提供先

1) 郵送（*印は注意報のみ）

○国関係

*農林水産省 消費・安全局植物防疫課、*同中国四国農政局 消費・安全部 安全管理課植物防疫係、同島根農政事務所(統計部、地域第一、二課)、気象庁松江地方気象台。

○独立行政法人

農業環境技術研究所、農業・食品産業技術総合研究機構 果樹研究所、同果樹研究所ブドウ・カキ研究拠点、同野菜茶業研究所、同近畿中国四国農業研究センター。

○他県関係

*鳥取、*岡山、*広島、*山口、*徳島、*香川、*愛媛、*高知、各県担当課。

○県内関係

農業技術センター、島根県立松江農林高等学校、同出雲農林高等学校、同邇摩高等学校、同矢上高等学校、同益田翔陽高等学校、同図書館、病虫害防除員(果樹)。

○県内団体

島根県農業協同組合中央会、全国農業協同組合連合会島根県本部、農業振興協会、島根県農薬卸商協会。

○報道機関

朝日、山陰中央、サンケイ、島根日日、中国、毎日、読売 各新聞社出雲支局（出雲市役所記者室）、NHK松江放送局、同出雲通信部、山陰放送、同ラジオ総局、山陰中央テレビ放送局、同出雲通信部、日本海テレビ、同出雲通信部。

2) F A X

○県内関係

島根県農林水産部 農業経営課、同農畜産振興課、同食糧安全推進課、東部、西部農林振興センター各農業普及部（松江、浜田、安来、中海干拓、雲南、出雲、県央、大田、益田）、隠岐支庁 農業普及部、同島前地域振興グループ、中山間地域研究センター、農業大学校、各市町村、各病虫害防除員（水稲）、浜田農林業支援センター。

○報道機関

日本農業新聞松江支局、同中国四国支所、出雲ケーブルテレビジョン、石見ケーブルテレビ。

3) メール

独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 中央農業総合研究センター、県内各農業共済組合。

4) ホームページ

発生予察情報（発生予報、特殊報、注意報、臨時情報）。

技術情報（技術資料、葉いもち情報、ウンカ情報、縞葉枯情報、果樹カメムシ情報、カキ フジコ ナカイガラムシ情報）

2. 発表状況

(1) 発生予察情報の発表状況

種 類	発表回数	発表部数	対 象 病 害 虫
発生予報	9回	240部	<p>○イネ 葉いもち2回、穂いもち4回、紋枯病5回、白葉枯病4回、縞葉枯病2回、萎縮病1回、黄化萎縮病1回、ヒメトビウンカ4回、ニカメイチュウ4回、ツマグロヨコバイ5回、イネドロオイムシ1回、イネミズゾウムシ3回、セジロウンカ4回、トビイロウンカ4回、コブノメイガ4回、斑点米カメムシ類4回。</p> <p>○ムギ うどんこ病3回、赤かび病3回、さび病類3回。</p> <p>○ダイズ ハスモンヨトウ1回。</p> <p>○ナシ 黒斑病8回、黒星病4回、シンクイムシ類7回、ハマキムシ類3回、ハダニ類8回、アブラムシ類2回、カメムシ類3回。</p> <p>○カキ 円星落葉病1回、うどんこ病4回、灰色かび病1回、カキミガ4回、チャノキイロアザミウマ1回、カメムシ類4回、カキクダアザミウマ2回。</p>

種 類	発表回数	発表部数	対 象 病 害 虫
			○果樹全般 カメムシ類 2回。 ○キャベツ 黒腐病 1回、菌核病 1回。 ○アブラナ科野菜 アブラムシ類 1回、コナガ 2回、アオムシ 1回、ハスモンヨトウ 2回。 ○タマネギ ボトリチス属菌による葉枯れ 3回、べと病 3回、腐敗病・軟腐病 3回、白色疫病 1回。 ○イチゴ 灰色かび病 2回、アブラムシ類 2回。
特 殊 報	3 回	2 5 0 部	○イチジク：イチジクモザイク病 1回 ○スモモ：スモモ斑入果病 1回 ○トルコギキョウ：キキョウトリバ 1回
臨時情報	1 回	2 4 0 部	○斑点米の原因となるカメムシ類 1回

3. 発表内容

1) 特殊情報

(1) 第1号 (平成23年4月5日)

イチジクモザイク病の本県での初発生が確認されたので特殊報を発表します。

【概況】

平成21年4月、出雲市のイチジクにおいて、葉脈に沿って著しい退色や葉の奇形症状が認められた(図1)。そこで、東京大学植物病院*に診断依頼したところ、イチジクモザイク病の病原である fig mosaic virus (イチジクモザイクウイルス [仮称]) が検出された。

- 1 病害虫名 イチジクモザイク病
- 2 病原名 fig mosaic virus (イチジクモザイクウイルス [仮称])
- 3 作物名 イチジク
- 4 発生場所 出雲市
- 5 発生生態

1) 病徴

葉、果実に症状がみられる。葉では葉脈に沿って著しい退色や奇形症状が現れる(図1)。また、果実の斑紋、未着果枝の発生及び節間の短縮を伴うことがある。症状は樹全体で見られる場合もあれば、同じ樹であっても主枝単位で見られる場合もある。

2) 伝染経路

感染した親株を用いた挿し木等による栄養繁殖によって伝染すると考えられる。また、海外ではイチジクモンサビダニにより伝搬するという報告がある。接触伝染、土壌伝染はしないと考えられる。

3) 宿主植物：クワ科イチジク (現時点では他の宿主植物の報告例はない)

6 防除対策

- 1) 健全苗を使用する。
- 2) イチジクモンサビダニに対して薬剤防除を行う。

農薬名	希釈倍率	使用時期	使用回数	成分の総使用回数
石灰硫黄合剤	20～40倍	冬期	—	石灰硫黄合剤：—
ダニトロンフロアブル	2000倍	収穫3日前まで	1回	フェンピロキシメト：1回
サンマイル水和剤	1000～1500倍	収穫7日前まで	1回	ヒリタベン：1回
ピラニカ水和剤	2000倍	収穫7日前まで	1回	テブフェンピラト：1回

注) 平成23年2月現在

7 その他

疑わしい症状が発生している場合は、病害虫防除所 (0853-22-6772) に連絡する。



図1 葉脈に沿った著しい退色と奇形



図2 イチジクモンサビダニ
(写真提供 東京大学植物病院®)

(2) 第2号 (平成23年9月20日)

ふいりか

スモモ斑入果病の本県での初発生が確認されたので特殊報を発表します。

【概況】

平成23年7月、出雲市の施設栽培のスモモ (品種：太陽) において、果実に斑入り模様の症状が認められた (図1)。そこで、島根県農業技術センターにおいて遺伝子診断 (RT-PCR法) により検定した結果、本県では未発生のスモモ斑入果病の病原であるホップ矮化ウイロイドplum系統が検出された。

本病は1985年に山梨県で初めて発生が報告され、その後、福島県、福岡県でも確認されている。

- 1 病害虫名 スモモ斑入果病
- 2 病原名 ホップ矮化ウイロイドplum系統 Hop stunt viroid-plum (HSVd-plum)
- 3 作物名 スモモ
- 4 発生場所 出雲市 (2圃場)
- 5 発生生態

1) 病徴

果実のみに発生する。葉や新梢などには症状は現れず、樹勢の低下も見られない。病徴は品種によって異なり、太陽、大石早生すもも、ビューティ、サンタローザは斑入果となる (図1、2)。一方、ソルダムでは斑入果症状は見られず、果粉の形成が薄く、果面が油を塗ったように光る。熟期になっても果肉は濃い朱色にならず、硬く黄色みがかって黄果症状となる。

熟期はいずれの品種でも健全果より7~10日ほど遅れ、果肉は締まり、軟化が遅れるとされている。

2) 伝染経路

主として接ぎ木伝染し、本病感染樹からの採穂によって広がる。ハサミを使った管理作業 (剪定等) によっても汁液伝染する。

3) 宿主植物

ホップ矮化ウイロイドplum系統として自然発生が確認されているのは、スモモだけである。

6 防除対策

1) 健全苗を使用する。

2) 発病樹は伐採して健全樹を栽植する。

3) ハサミを使った作業管理 (剪定等) を行う場合は、1樹毎にハサミの刃を家庭用塩素系漂白剤 (次亜塩素酸ナトリウム含有の「ハイター」等) 2倍液に30秒間浸けて消毒する。

7 その他

疑わしい症状が発生している場合は、病害虫防除所 (0853-22-6772) に連絡する。

図1 スモモ
斑入果病

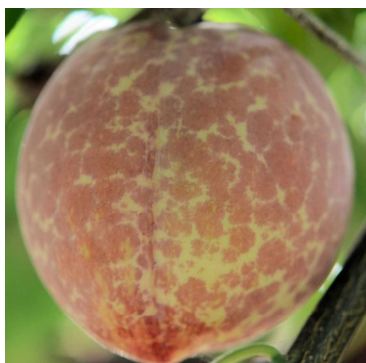


図2 スモモ斑入果病の発生状況

(3) 第3号(平成24年3月14日)

1 害虫名 : キキョウトリバ *Stenoptilia zophodactylus* (Duponchel, 1840)

2 発生作物 : トルコギキョウ

3 発生確認場所 : 安来市

4 発生確認の経緯

- 1) 平成23年8月に安来市のハウス栽培のトルコギキョウ圃場において、花蕾に穴をあける害虫が発生しているとの報告を受けた。現地調査した結果、チョウ目と思われる幼虫による花蕾の加害を認め、幼虫と蛹を採集し、室内で羽化させたところ、トリバの仲間と思われた。標本の同定を豊田市矢作川研究所の間野隆裕氏に依頼した結果、キキョウトリバと判明した。
- 2) 本虫はリンドウ科の植物を加害する。日本では1975年に福岡県のトルコギキョウで採集されて以来、公式な採集記録はない。
- 3) 発生面積は4a、被害株率は15%、被害花蕾率は2%であった。

5 形態及び生態

成虫は開張16~23mm、幼虫の体長は10~11mm、蛹の体長は9~11mm、卵は長さは0.4mm・幅0.25mmである。

詳しい生活史は明らかではない。採集時の観察によると、卵は花蕾上に1卵ずつ産みつけられ、幼虫は花蕾に穿孔し、茎や葉上で蛹化する。

6 被害の特徴

花蕾に穴をあけて侵入し中を食害する。被害を受けた花蕾は商品価値がなくなる。

7 寄主植物

本種の寄生植物はリンドウ科の植物である。

8 防除対策

- 1) ハウスの場合開口部に寒冷紗を張り、成虫の侵入を防ぐ。
- 2) 本種に対する登録農薬はない。



成虫(間野隆裕氏撮影)

図1 キキョウトリバの形態(左:成虫、中:老熟幼虫と卵、右:蛹)



図2 キキョウトリバ(幼虫)による被害

2) 臨時情報

(1) 第1号(平成23年7月27日)

斑点米カメムシ類の発生が多く、ハナエチゼンや出穂したコシヒカリ等ではカメムシ類が高密度に生息する圃場がみられます。今後、斑点米被害の多発生が懸念されますので臨時情報を発表します。発生状況の把握に努めるとともに、適切な防除指導をお願いします。

記

1. 病害虫名 斑点米の原因となるカメムシ類
2. 発生地域 県下全域
3. 発生時期 7月下旬～
4. 発生量 やや多い～多い
5. 臨時情報発表の根拠

1) 7月22～26日に収穫している極早生圃場ですくい取り調査を行ったところ、発生圃場率は81.0%(平年:72.3%)、平均頭数は8.3頭/20回振り(平年:6.4頭)で平年に比べてやや多い。特にアサジカスミカメ、ホソハリカメムシの生息密度が高い圃場が各地で認められる。

2) 予察灯でのアサジカスミカメの誘引数は171頭(7月第4半旬までの累積数、平年101.3頭、昨年41頭)で平年に比べてやや多い。

6. 防除対策および防除上の注意事項

1) 耕種的防除

- ・斑点米カメムシ類は畦畔周辺の雑草で増殖するので収穫10日前までに除草を行う。
- ・収穫間際になってからの除草は斑点米カメムシ類を水田内に追い込むことになるので行わない。収穫期以降の草刈りは本田の薬剤防除の直前に行うようにする。
- ・圃場内のヒエ類などの穂はカメムシ類の増殖源となるので早急に処分する。

2) 薬剤による防除

- ・粉剤、液剤による防除は、第1回目は穂揃期の3日後、第2回目はその10日後に散布する。その後、圃場に成虫や幼虫の発生が認められる場合には追加防除を行う。
- ・畦畔などにイネ科雑草がある場合は、畦畔を含めて散布する。
- ・広域的な一斉防除を行うとより効果的である。
- ・粒剤による防除は収穫7～10日後に湛水状態で行い、その後成虫や幼虫の発生に応じて追加防除を行う。
- ・薬剤の使用に当たっては、農薬の使用基準ならびに農作物病害虫雑草防除指針の注意事項を遵守する。

図1. 収穫した圃場でのすくい取り数

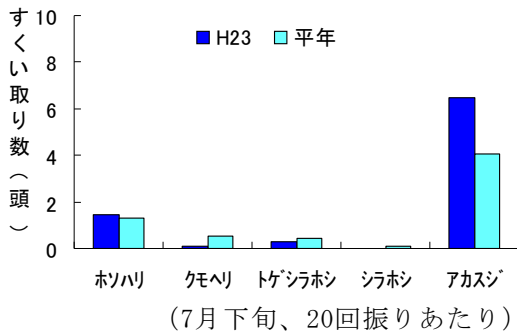
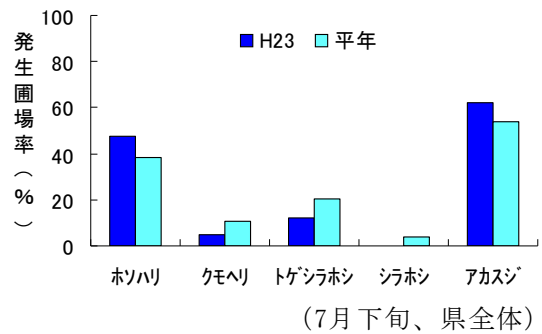


図2. 収穫した圃場での発生圃場率



アサジカスミカメ (左:成虫 右:幼虫)



ホソハリカメムシ (左:成虫 右:幼虫)

